

## 藤原宮第19次の調査

(藤原京右京7条1坊)

(昭和51年11月～昭和52年2月)

この調査は、橿原市が上飛弾町に計画した宅地造成に伴う事前調査である。調査地は藤原宮南面中門から南西に300m、朱雀大路および日高山の西方、第17次調査区の南西に位置する水田で、藤原京右京7条1坊の推定地にあたる(3頁の地形図参照)。なお、調査面積は2,600㎡である。

藤原京条坊の坪割については、最近の発掘調査の成果から、東西・南北とも各1条の小路によって4つの坪に分けていることが明らかになっており、後述するように今回の調査でも7条条間小路にあたる道路を検出した。しかし、現在のところ藤原京における坊内の坪についてはその呼称が明らかでないため※。ここでは仮に平城京の坪と同じ順序で呼ぶことにする。この呼称に従えば、今回の調査区は藤原京右京7条1坊3坪と4坪にあたる。なお方位は国土調査法による第6座標系の方眼北(N6°48'72"W)を使用した。

各遺構は同一遺構面で検出したが、遺構の切り合いや出土遺物から、藤原宮造営前、藤原宮期、中世以降の3時期に大きく分けることができる。このうち中世以降の遺構は、東西および南北方向の細溝以外に顕著なものはないので、ここでは省略し、藤原宮造営前の遺構をA期、藤原宮期の遺構をB期とし、両期の遺構について述べる。

A・B期の主な遺構は掘立柱建物13、道路1、掘立柱塀6、溝3、土壇20である。(第2表参照)

〔A期の遺構〕 掘立柱建物7、溝1、掘立柱塀1と自然の流路SD1861・1870がある。建物の振れをみると、北で東に振れるものと、北で西に振れるものがある。藤原宮第16次調査の結果によると、藤原宮造営前の建物は、北で東に振れるものが古く、北で西に振れるものが新しい傾向を示すことが指適できる「概報6」参照。ここでは、前者をA<sub>1</sub>期、後者をA<sub>2</sub>期とする。

A<sub>1</sub>期の遺構には掘立柱建物2がある。SB1971は南北棟の総柱の建物である

が、西側柱列と棟通りの柱筋は不揃いである。南と北の妻および北妻から3番目の柱穴は、径10~15cmの玉石を5~6個用いて根固めをしている。SB1996は1間×1間の東西棟で、直径10cmの柱痕跡をもつ小規模な建物である。

A<sub>2</sub>期の遺構には掘立柱建物5、掘立柱塀1、溝1がある。SB2026は桁行5間・11.6m、梁行2間・5mを測り、この時期では最大規模の建物である。この建物は柱をたてるにあたって、柱掘形の底をさらに一段掘り凹め、その部分に45×30cm前後、厚さ15cm前後の平らな石を据え、石の上に柱をたてている。SB2010はSB2026の南で検出した。南妻の柱穴は明らかでない。SB2009は東西棟で東妻柱列のみ検出した。東南隅柱には柱根が残る。SB2008はSB2009と重複する建物であるが、棟の方向、規模およびSB2009との先後関係は不明である。SB1995はA<sub>1</sub>期のSB1996と重複するほぼ同規模の建物である。

東西溝SD2033は調査区中央付近で検出した。幅0.45~0.6m、深さ0.2~0.45m、長さ45m以上の素掘りの溝で断面形はU字形を呈する。溝には砂を含む灰褐色粘質土が堆積し、東の方で木片および曲物、7世紀後半の土師器片が出土した。掘立柱塀SA2036は調査区の北西部で検出した。付近には同期の遺構はない。

〔B期の遺溝〕 掘立柱建物6、道路1、溝2、掘立柱塀5、井戸1、土壇20がある。遺構は道路、藤原京右京7条1坊3坪、4坪のものにわけて記す。

道路SF2031は北側溝SD2032と南側溝SD2030を伴ない、路面幅約6m、溝心々距離約7mを測る。北側溝SD2032は幅1.2m、深さ0.2mの素掘りの溝で、調査区中央付近で浅くなり東半は削平されている。南側溝SD2030は幅0.75~1.45m、深さ0.25m前後の素掘りの溝である。溝には暗灰褐色粘土が堆積し、藤原宮期の墨書土器、木簡、軒平瓦(6643C)、木製鋤などが出土した。この道路SF2031は側溝から藤原宮期の遺物が出土したことから7条条間小路の推定位置と一致していることから7条条間小路と考えられる。なお、SF2031は西で南に約2°振れている。

3坪の遺構 SF2031より南の3坪では、坪の北半部を調査した。遺構の重複関係からB<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>の2期にわけることができる。

B<sub>1</sub>期ではSF2031の南側溝SD2030の心から3m(10尺)の位置にSF2031と平行する東西の掘立柱塀SA2029を検出した。SA2029は未調査部を含めて28間分・62.5mある。柱間はばらつきがあるが、2.2m前後のものが多い。3坪の遺構は全てSA2029の南に配置されており、SA2029はその位置から、坪の北を画する施設とみてよい。SA2029の東から10番目の柱穴を起点として、南北の掘立柱塀SA1997が南に延びる。2間分4.4mを検出した。SA2029の南9.6mには東西の掘立柱塀SA2020がある。14間分38mを検出した。柱間は3.3m前後である。SA2020の柱穴は西方でSB2025の柱穴と重複しており、SA2020が古い。B期の中では比較的早く廃絶したものと思われる。

B<sub>1</sub>期の建物はSA2020の南で検出した。SB2000は北側柱列がSA2020の南7.5mにある東西棟の建物で桁行6間14.4m、梁行3間5.7mを測る。柱間は桁行が2.4m等間、梁行が1.9m等間である。柱掘形も一辺1m前後あり、今回の調査範囲内では最大規模の建物である。柱は全て外側に向けて抜き取り、柱抜き取り穴の埋土は雲母を多量に含む灰褐色土である。SB2000を東西に二分する中軸線は、ほかの条坊遺構から推定される3坪の中軸線とほぼ一致する。SB2000の北側柱列の東と西には東西の掘立柱塀SA1975とSA2005がとりつく。SA1975は4間分・9.8mを検出した。SA2005は2間分4.8mを検出した。SA2005はさらに西に延びる可能性もある。SA1975・2005ともSB2000にとりつく部分の柱間を狭くっており、実際にその間を閉じていたかどうかは不明である。

SB2000の南東部には東西棟SB1970がある。南側柱列は柱痕跡



SB 2000 (東から)

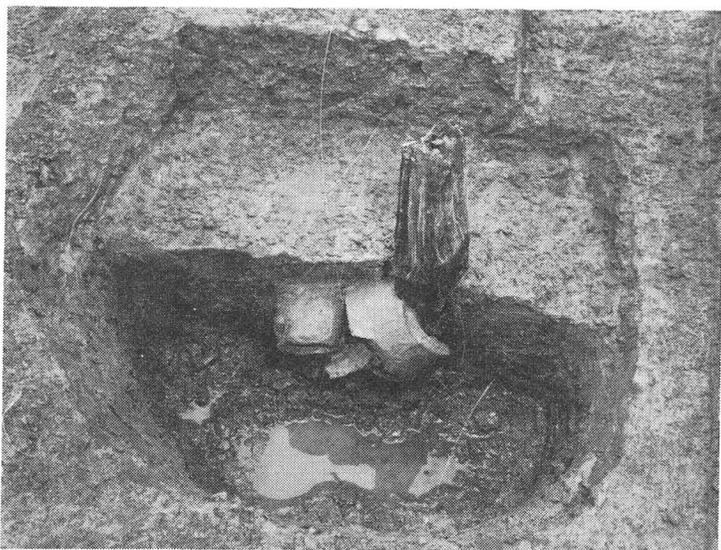
を残し，桁行柱間18m等間，梁行柱間165mである。SB2000，SA1975，SB1970に囲まれた部分に井戸SE1973がある。掘形の平面形は径2.2mの円形を呈し，深さ1.6mを測る。井戸枠は抜かれていたが，井戸底で，井戸枠を据えたと思われる96×80cm，深さ25cmの楕円形に掘り凹めた部分を検出した。井戸からは藤原宮期の土師器と木片が少量出土した。

3坪の東にはSB1994がある。南北棟で北の妻柱列を検出した。梁行2間，1.5m等間である。

B期の土壌のうち大部分はSB2000の北方に掘られている。SK2015からは埴仏の筈が出土した。SK1980は小鍛冶の炉壁と思われる熔融物が出土したが，壁面は焼けていない。このほかに顕著な遺物を出土した土壌はないが，SK1980のように焼土，灰を多く含む土が堆積するものが多い。

B<sub>2</sub>期の遺構にはSB2025，SX1972がある。SB2025は総柱の建物で，SA2020が廃絶した後に建てられている。柱間は桁行1.7m等間，梁行1.5m等間である。SX1972はSB1970と重複する。東西1間，柱間1.8mを測るが，その性格は不明である。

B<sub>1</sub>期からB<sub>2</sub>期まで存続する遺構としては坪の北を画する塀SA2029のほかは明らかでない。SB2000の柱抜取穴の埋土はSA2020の抜取穴と同じものであ



S B 2040 北西隅柱穴

り，SB2000はSA2020と同時に廃絶した可能性が強い。調査区からは奈良時代に属する遺物は出土しておらず，B<sub>2</sub>期も藤原宮期としてよいものと思われる。

**4坪の遺構**，3坪に比較して遺構は少ない。掘立柱建物2，土壌1を検出した。3坪で坪

の北を画していた SA2029 のような施設は 4 坪の南には設けられていないが、坪の東では 17 次調査で検出した南北塀 SA1855 を坪の東を区画する施設とみなすことができる（3 頁の図参照）。

4 坪の西で検出した SB2035 は南北棟で、側柱列の柱間のうち両端を 2.3m にとり、中の間は広くとり 2.6m としている。側入りの建物であろう。SB2040 は坪の東で検出した東西棟で、北に廂のつく建物である。身舎の柱間が桁行 2.3m 等間、梁行 1.8m 等間であるのに対して、廂の出は 2.4m を測る広廂の建物である。西妻柱列のうち南西隅の柱穴以外はいずれも柱根が残る。北西隅の柱穴からは根固め石に代用した状態で軒丸瓦 6274A 型式 1 点が出土した。

土壙 SK2035 は SB2040 の南東に検出した瓦溜りで、丸・平瓦が出土した。

〔遺物〕 木簡、瓦、土器、木製品、埴仏範などがあるが出土量は少ない。

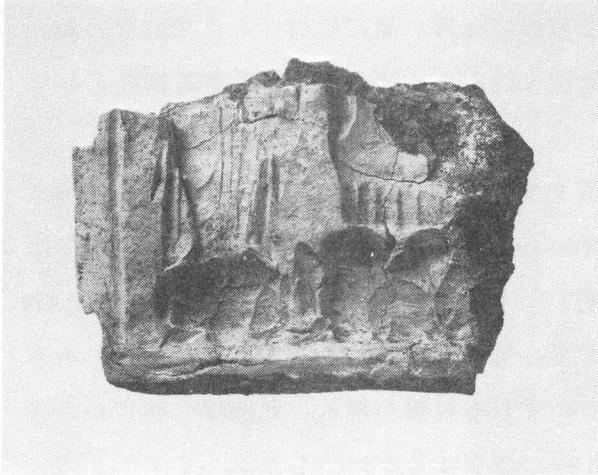
木簡は判読できるものはなく、墨痕の残るもの 2 点が出土した。

瓦は軒丸瓦・軒平瓦各 7 点と丸・平瓦がある。軒瓦を型式別にあげると、軒丸瓦では 6233A・6275I 各 1 点、6274A 4 点、不明 1 点、軒平瓦では 6643C・6561 各 1 点、6647C 2 点、6643A 3 点となる。このうち 6561・6643C・6647C は調査地の東に隣接する日高山瓦窯の製品のなかには従来みられないものであり、今後の検討を要する。

土器は土師器と須恵器が出土したが、遺構から出土したものは少ない。墨書土器は 1 点ある。SD2030 から出土したもので、藤原宮期の土師器杯 A の底部外面に「米」の墨書がある。

木製品には鋤と曲物がある。鋤は柄の一部を欠くが、現長 69cm、刃部最大幅 18cm・最大長 26cm を測る長柄鋤である。曲物は容器の底板または蓋板で円形を呈する。直径 16.5cm を測り、3カ所のとじ孔を残す。

埴仏範は SK2015 から出土した。範は雄型に粘土を押し焼成したもので、左下半部を残し、現存幅 9cm、高さ 6.5cm を測る。大小の蓮華座と 2 体の立像下半身が残る。復原すると、中央に如来立像を配し、左右に脇待菩薩立像をおく形式となる。ただ如来立像の蓮華座が左右対象にならず、蓮弁に傾きがあることから、これを中尊とせず四尊あるいは五尊形式になる可能性もある。この範か



S K 2015 出土埴仏範

ら製作した埴仏はどの寺で用いられたか現在知られていない。埴仏範の出土からすると付近に工房址があった可能性もある。

〔まとめ〕 今回の調査によって、藤原宮造営前の遺構を明らかにするとともに、藤原京の各坪の実態をつかむ手がかりを得た。

A期とした藤原宮造営前の遺構の年代については、A<sub>2</sub>期のSD2033から7世紀後半の土師器が出土しており、A<sub>2</sub>期は条坊施行直前の時期とすることができる。A<sub>1</sub>期はSB1996が廃絶した後にほぼ同規模のA<sub>2</sub>期の建物SB1995が建てられていることから古くとも7世紀後半をそれほど遡らない時期と思われる。A<sub>2</sub>期の遺構のうち、SB2009とSB2008が重複していることや建物の振れがSB2006のように方眼北に近いものとそうでないものがあり、A<sub>2</sub>期はさらに細分される可能性がある。

藤原宮期の遺構では、右京7条1坊3坪の場合、建物群の性格は明らかでないが、建物は計画的に配置されていたことが明らかになった。すなわち、坪の北を東西塀SA2029で小路と平行に画し、坪を東西に二分する中軸線上に大規模な東西棟建物SB2000を建てる。小規模な建物や井戸は中軸線はずして配置している。3坪は坪の北半部を調査したのみであるが、坪の中を細分するような施設は検出していない。坪全体を一つの宅地として使用していたものか、あるいは複数の宅地として使用していたものか明らかでないが、前者であれば主屋を坪の中心、SB2000の南方に想定できよう。

坪と道路を画する施設は3坪、4坪とも掘立柱塀である。4坪では坪の東には西1坊坊間小路との間を画する南北塀を設置するが、坪の南を画す施設はない。従って坪と道路との間を画する施設は必ずしも坪の四周に設置されていたものでないことが指摘できる。

7 条条間小路については，東接する17次調査区で小路の南側溝位置に一致するとされている東西溝 SD1845 が検出されている（概報 6）。SD1845 を南側溝とすると，藤原宮期の井戸や鑄造炉跡が小路上に作られていたことになる点や SD1845 を西へ延長した場合，4 坪の東を画する南北堀 SA1855 によって小路が閉塞されるという矛盾点が指摘されている。小路側溝 SD2030・2032 を東へ延長した場合，SD1845 はいずれの溝とも一致せず大きく北へずれる。従って SD1845 を小路南側溝とするには問題が多い。

今回検出した 7 条条間小路を東に延長すると延長線上に日高山および日高山瓦窯が位置する。日高山と小路の関係は，①小路は日高山の山裾までしか作られなかった。②日高山の山腹を越えて朱雀大路まで直線的に作られた。③山腹にあたる部分は北に迂回させて朱雀大路に続けたことが考えられる。今回の調査区の東は墓地となっているので，それを明らかにすることは困難である。藤原京の大路や小路が丘陵にあたる場合，それをどう処理しているかが今後の問題として残る。

なお，SF2031 の中心座標を坪の中軸線上で示すと下記のようなになる。

$$\left( \begin{array}{l} X = -167.238.2 \text{ m} \\ Y = -17.618.4 \text{ m} \end{array} \right.$$

※藤原京の坊・坪の名称を表わすものとして『続日本紀』天武天皇 3 年正月の条に「林坊」，平城宮朱雀門下層で検出した下ツ道の側溝 SD1900 出土の過所木簡に「左京小治町」がある（『平城宮木簡 2』参照）。

#### 図面の座標

当調査部では，遺跡の実測にあたって，国土調査法による第 6 座標系（以下国土方眼と略す）を基準としている。本概報の図面に記入してある座標もこれによっている。例えば藤原宮大極殿基壇の東南にあるベンチマークの座標は，

$$X = -166,508.84 \quad Y = -17,404.92$$

である。ただし図面では X，Y および - を省略してある。

## 第19次調査主要遺構一覧表

時 期	遺 構	規模(柱間・規模、 <i>m</i> )	備 考
A <sub>1</sub> 期	SB 1971・南北棟	5×2間・9.0×6.0	総柱 SB 1970・SA 1975より古い。
	SB 1996・東西棟	1×1・3.0×2.0	SA 2029より古い。
A <sub>2</sub> 期	SB 1995・東西棟	1×1・2.9×2.7	
	SB 2008・?	?・?	
	SB 2009・東西棟	?×2・?×4.8	
	SB 2010・南北棟	4×2・6.8×4.0	SA 2005より古い。
	SB 2026・東西棟	5×2・11.6×5.0	SA 2020より古い。
	SA 2036・東西塀	4・8.0	
	SD 2033・東西溝		
B <sub>1</sub> 期	SF 2031・小路		7条条間小路。
	SD 2030・東西溝		7条条間小路南側溝。
	SD 2032・東西溝		7条条間小路北側溝。
	SB 1970・東西棟	3×2・5.4×3.3	SB 1971より新しい。
	SB 1994・南北棟	?×2・?×3.0	
	SB 2000・東西棟	6×3・14.4×5.7	
	SA 2029・東西塀	28・62.5	
	SA 1975・東西塀	4・9.6	SB 2000の東にとりつく。SB 1971より新しい。
	SA 2005・東西塀	2・5.9	SB 2000の西にとりつく。
	SA 2020・東西塀	14・38.0	SB 2025より古い、SB 2026より新しい。
	SA 1997・南北塀	2・4.4	
	SE 1973・井戸		
	SB 2035・南北棟	3×2・7.2×3.8	
	SB 2040・東西棟	3×3・6.9×6.0	北に廂。
B <sub>2</sub> 期	SB 2025・東西棟	3×3・5.1×4.5	総柱 SA 2020より新しい。

